

2022/1/10

(うときゅういっきの「これからは」発想や視点の転換) 書庫版



メディアの論調はいきなりこう始まります。

人口減を指して「衰退だ」と。

みている我々は無意識に「そうだ」とすんなり思ってしまいます。

「衰退」となれば、次には「歯止め」が意識され、反動でその逆語である「成長」を再び強く求め始めます。

自分はここに何かのドグマを感じます。

即ち「今真での発想と何ら変わっていないじゃないか」

例えば発想の転換トレーニングとして減っていいものを挙げてみましょう。

「借金が減った」「贅肉が減った」「苦痛が減った」等など、減って悪いことばかりでもなさそうです。

成長を単純に「増えること」とすれば「借金が増えた」「贅肉が増えた」「苦痛が増えた」は好ましくないことに数えられます。

次に言い方を変えるトレーニングをしてみましょう。

「人口減は人類の衰退である」

というのを、

「突出した人口の増加から転じ、他の生物との量的バランスを取り始めた」

と置き換える訳です。

この発想を持つためには視点を人類以外にも広げなくてはなりません。

「人類側から」外界（地球）をみるのではなく、地球側に偏りすぎてもいない人類側にも偏りすぎていない第三の視点から「人類を」見る訳です。

誰の都合でもない道理、即ち「物事の自律的メカニズム」に沿ってみるが必要になります。

その視点からみれば「全体均衡バランス」という点で「人類衰退」換言すれば「人口＝人目人科の数量減」はそれほど悪いことではないような気がします。

言い方としては

「地球上の全体均衡バランスへの方向転換」

とか。

無論これは「人口の自然減」の話であって、暴力的な手段で人の数を減らすという事ではないことだけは強く申しあげておきたいと思います。